

第8節 まとめ

1. 縄文時代

古市流田遺跡では、前期前葉に遡る可能性のある土器、および後期中葉、晩期中・後葉の土器が少量出土した。遺構としては後期中葉～晩期中葉のものと思われる土器の伴う土坑が1基あるにすぎない。平成10年度に行った古市河原田遺跡では、中期後葉から晩期後葉にかけての土器が出土し、後期中葉、晩期後葉の遺構面を部分的に検出している。古市カハラケ田遺跡では後期中葉の貯蔵穴と思われる土坑が検出されている。現状では、古市地内における縄文時代集落の出現がどこまで遡るか特定はできないが、少なくとも後期中葉以降は断続的に集落が営まれていた可能性が高い。また、遺物量からすると、古市河原田遺跡8層中出土の夾帯文土器の量は他の時期のものに比べ突出しており、晩期後葉に一つのピークがあることは間違いないだろう。古市河原田遺跡8層出土の土器の中には、初痕と思われる圧痕が確認できるものもあり、古市流田遺跡の調査では該期の水田跡の検出も期待されたが確認できなかった。また、1点ではあるが、土偶の足部片(第39図123)が出土している。弥生時代中期前葉に埋没したSD9からの出土で所属時期は明らかにできないが、伴出する縄文土器(第39図116～122)から後期中葉～後葉の可能性が高い。県内では、古市河原田遺跡2例、東伯郡北条町島遺跡1例に続く、4例目となる。

2. 弥生時代

前期 古市流田遺跡では、SX2④層から該期の土器が出土しているが、具体的な遺構は検出できなかった。前期中葉～後葉にかけてのものが出土しているが、いずれも量的には少ない。第49図200は口頸部に明瞭な段をもつ壺で、今回の調査で出土した弥生土器の中では最も古相の要素をもつ。口縁部は比較的直線的で、口頸部は接合面を利用し、さらにハケ状工具で明瞭な段を作り出している。調整はハケメナーナド・ミガキである。このような特徴のうち、口縁部が直線的であること、明瞭な段を形成している点は、山陰地方最古の涼賀川式土器とされる出雲原山式土器の特徴にあてはまる。しかし、出雲原山式土器の指標とされる鳥根原山式土器に比べて、これらに伴う壺については不明な点が多い。また、古市流田遺跡では出雲原山式土器に相当する壺は出土していない。当遺跡で最も古相の壺は第49図205～207のような1～2条程度のヘラ描沈線文が施される壺であるが、これらが200のような壺とセット関係にあると想定するなら、出雲原山式土器に後出する段階のものと位置づけるのが妥当であろう。

また、加茂川よりの地点は湿地であろうとの見込みから、該期の水田跡の存在を期待していたが、調査地内ではSX2を除き湿地を呈す場所は皆無であった。花粉分析の結果、古市流田遺跡周辺ではカシを主とする照葉樹林が多く分布し、クマザサやネザサなどのササ類が部分的に生育、やや乾燥したところではシヤクリなどが分布していたようである。また、湿地(SX2)周辺には、川辺や谷沿いに生育するトチノキなどが分布していたようで、SX2④層には炭化したトチノキの堅果片が含まれていた。

中期前葉 SD9②～⑤層、SX2③層から中期前葉に相当する第II様式土器が出土している。詳細は考察を参照していただきたいが、この両遺構から出土した土器にみられるクシ描文の比率から、これらの土器群には若干の時間差が想定される。2次堆積資料ではあるが、該期のまとまった資料として貴重である。

SD9②～⑤層、SX2③層はいずれも黒色土で、比較的安定した堆積状況を示しており、水田跡の確認のため、プラント・オパールおよび花粉分析を行った。イネ科のプラント・オパールの量はSD9②～⑤層で1700個/g、SX2③層で1200個/gで、当地点で水稲耕作が行われていた可能性は少ない。しかし、SX2でみると、弥生時代前期の堆積④層ではイネ科のプラント・オパールは未検出で、③層では大幅に増加していることになる。このことを積極的に考慮するなら、中期前葉段階には本調査地周辺で水稲耕作が行われている可能性が高い。

花粉分析の結果から推察される周辺環境は、概ね、前段階とかわらないが、SX2周辺ではイネ科をはじめ、

ヨモギ属、カタツリグサ属などの人里草本が生育しているようで、人為要因による植生の変化が窺われる。このことはSX2①層→③層にかけて認められるプラント・オパール増加傾向と一致する。

3区をはほぼ直線的に東西に横切るSD15は、断面形が逆台形ないし部分的にはV字状を呈する手による溝である。埋土を分析した結果、花粉はほとんど検出できず、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境（有機質遺体を分解する堆積環境）であったと推定される。また、イネ科のプラント・オパールは全く検出されていない。調査時には、溝の位置、方向から水田に伴う用水路のような性格も想定していたが、この可能性については否定されよう。遺構の時期は、少量の遺物から推察するかぎり、中期前葉を中心に、遡っても前期中葉のものと推察される。このことと、常時、乾燥した堆積環境であったことを考慮するなら、環濠であったとも考えられる。しかし、周辺にみられる該期の環濠が丘陵や微高地上に築かれるのに対し、当遺跡では低地に位置すること、また、遺構内に含まれる遺物量が少ないなど、環濠と考えるには否定的な要素も少なくない。

中期中葉 この時期の遺物はこれまでの調査でも、ほとんど確認されていない。今回の調査でも、この時期に遡る可能性のある小片が数点ある程度である。現状では、この時期に一時的な断絶があったと考えるのが妥当であろう。

中期後葉 この時期の土器は包含層から出土しているが、具体的な遺構は未検出である。このような状況は、古市地内のこれまでの調査でも同様である。土器は摩滅したものが多く、当調査地の近隣に該期の遺跡が展開しているものと思われる。

後期 古市流田遺跡では堅穴住居跡（S11）が1棟検出された。掘立柱建物跡（SB4-12）もこの時期のものと捉えられる。当調査地の南に位置する古市カハラケ田遺跡でも立て替えの確認できる堅穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。このことから、堅穴住居とそれに伴う数棟の掘立柱建物が集落内に散在する形で構成される小規模な集落像を想定したい。

平成10年度に行われた古市カハラケ田遺跡の調査では、弥生時代中期後葉～古墳時代中期までの土器が出土するSD19に着目し、この溝の北側で堅穴住居跡が確認できること、周辺の掘立柱建物跡の主軸がSD19にそろうことから、「貯蔵区と居住区が溝状遺構によって分けられた」集落が考えられている。しかし、古市流田遺跡の調査成果も加えてこのことを検証するなら、以下の理由から積極的に肯定しがたい。

- ①古市流田遺跡、古市カハラケ田遺跡で検出された弥生時代後期の堅穴住居跡は群を形成していないこと。
- ②区画溝とされるSD19の存続期間について。

まず、①について、古市カハラケ田遺跡で検出された弥生時代後期の堅穴住居跡は建て替えを除くと1棟、古市流田遺跡でも1棟という状況である。古市カハラケ田遺跡の堅穴住居跡は2度の建て替えが行われており、このうちの一時は、古市流田遺跡のものと同時に存在していた可能性が高い。この両堅穴住居跡は直線距離にして約120m離れていることから、古市に形成された該期の集落では住居跡が特定区域にまとまっていなかった可能性が高い。また、両住居跡の周辺には数棟単位で掘立柱建物跡が検出されていることから、堅穴住居1棟に掘立柱建物数棟という組み合わせの集落構成を窺うことができる。そして、②に関しては、たしかに遺構の下位に弥生時代後期を中心とする時期の土器、上位に古墳時代中期の土器が分布する傾向がみられるが、このような現象は、弥生時代の包含層を掘り込む溝状遺構には当然考え得る堆積状況である。このような堆積状況をもって、弥生時代後期～古墳時代中期におよぶ長期の存続期間を見込むことはできない。SD19の掘削時期については明らかにできないが、古墳時代中期以降と考えるのが妥当ではなからうか。なお、古墳時代中期～後期における集落形態が、居住区と倉庫群に大別される形態であったであろうことについて異論はない。

3. 古墳時代

古市地内では古市流田遺跡、古市カハラケ田遺跡で、古墳時代を通して集落が営まれていたものと推測される。また、古市カハラケ田遺跡では、遺構の分布が、堅穴住居跡の集中する居住区と掘立柱建物跡の集中する倉庫群に大別できることから、当時の集落形態を窺うことができる。また、宮ノ谷池周辺の丘陵上に分布する古墳群の

造墓集団との関わりが考えられよう。

4. 奈良時代

古市・新山地内は古代山陰道の通過推定地である。古代山陰道が米子平野をどのように通過するかということについては3者の説がある。米子平野を南側に迂回し岸本町大蔵・板長付近→岩屋谷→会見町諸木・天万を経て手間割推定地である鳥根県伯太町安田関に至るルート进行を想定する中林保説。岸本町岩屋谷→会見町諸木・天万・寺内を経て渡田峠を越えて出雲へ至るルート进行を想定する日野尚志説。米子市福万→諏訪→青木→榎原・橋本→古市・新山を経て鳥根県伯太町安田関に至るルート进行を想定する中村太一説である。近年、この山陰道に関する学史をまとめた加納真人氏は、ルート上に遺跡が少ないなどの問題点があるとしながら、中村説を支持している。

加茂川右岸に南北に長い調査区を設定した古市流田遺跡では、古市・新山地内における山陰道の有無が明らかになる可能性が期待されたが調査の結果、山陰道の存在を示唆する遺構を検出することはできなかった。古市・新山地域では圃場整備により田圃が旧地形をほとんどどめていないことも、今回の調査で古代山陰道に関連する遺構を検出できなかった一因かもしれない。平成10年度に調査が行われた古市カハラケ田遺跡でも、関連する遺構は未検出であることから、現状では、加茂川右岸における山陰道の存在は積極的肯定できない。また、加茂川左岸はすぐに丘陵に接しており、山陰道の存在は考えがたいことから、中村説新山付近を通過する関山越えルートは一步後退のように思われる。しかし、次の理由から、今回の調査で得た考古学的証拠では、中村説を完全に否定できないものとする。

- ① 出雲風土記に記されている手間割の有力候補地が鳥根県伯太町安田関付近であること。
- ② 古市・新山地域が、7世紀後半以降、官衛的性格を強める陰田遺跡群と近い位置関係にあること。
- ③ 山陰道に関連する遺構が現在の舗装道路下にある可能性。

まず①について、古代山陰道は伯耆・出雲の国境にある手間割を通過するとされている。手間割をどこに推定するかによるが、安田関とみた場合、古市・新山地域付近を古代山陰道が通過している可能性は高い。②について、近年、国道9号、国道180号道路改良工事に伴う一連の埋蔵文化財調査により、律令期における陰田遺跡群の具体相がしだいに明らかになってきている。陰田第6遺跡では南北に延びる石敷道路が8世紀代に敷設されている。陰田子大田遺跡では「館」「田知」「多知」と記された墨書土器が出土しており、このことは国境に位置する陰田遺跡群に郡司の官舎や公使官人旅舎と推定される施設「館」が存在した可能性を示唆している。また、遺跡群内では各所で鍛冶関連の工房の存在も指摘されている。このように、陰田遺跡群は官衛的性格を帯びており、古代山陰道もこの地域付近を通過している可能性が想定される。③、現在、古市流田遺跡、古市カハラケ田遺跡の間を東西に延びる道路は、加茂川左岸を走る県道米子伯太線敷設以前は、旧来より伯耆から出雲へ向かう街道であった。この街道が古代において山陰道であった可能性もあろう。

古市遺跡群における発掘調査による考古学的証拠からは、古市・新山地域における古代山陰道の存在を積極的には肯定できない。しかし、周辺の歴史的環境からは、古市・新山地域における古代山陰道の存在を完全に否定できないことを指摘しておきたい。

註) 以上の参考・引用文献については、第2章を参照。

最後になりますが、古市遺跡群の発掘調査が地域の歴史解明に多少なりとも貢献できれば幸いです。また、発掘・整理作業に従事していただいた方々に厚く感謝申し上げます。

(濱田・内田)

第5章 考察

古市流田遺跡出土の弥生時代・第Ⅱ様式土器について

1. はじめに

第Ⅱ様式(弥生時代中期前葉)とされる土器は、クシ描文の登場により、ヘラ描沈線文に特徴づけられる第Ⅰ様式(弥生時代前期)と区分される。しかし、その器形や文様構成には、ヘラ状工具→クシ状工具という施文原体ほどの変化は認められない。また、クシ描文が施される土器に、ヘラ描沈線文の施された土器が伴うことも少なくないし、「ヘラ描とクシ描の違いを除けば区別がつけにくい個体」が多ことも事実である¹⁾。清水真一氏は、因幡・伯耆地域の土器編年で、第Ⅱ様式土器について「確証はつかんでいない」としたうえで「罫描平行線の施文状況などで二分化」を試みているが²⁾、この段階の良好な資料が少ないこともあり、十分な理解を得るに至っていないのが現状である。

当該地域における第Ⅰ様式の終わりから第Ⅱ様式という段階は、縄文系弥生土器(突帯文系土器)の欠落、環濠の消長にみるように、縄文から弥生への移行が終わり、本格的な弥生社会の形成に向けて集落が再編される時期と捉えることができる³⁾。それゆえ、この第Ⅱ様式土器の編年作業の重要性を感じるのである。

古市流田遺跡では、SD9、SX2といった遺構から、第Ⅱ様式の土器が出土した。いずれも2次堆積資料であり、様式として把握できる一括資料ではない。しかし、両遺構を比較すると文様施文工具の比率に顕著な差が認められる。このことに着目し、山陰地方東部における第Ⅱ様式土器について見直しを得ることを目的とした予察を行う。

2. 壺形土器・甕形土器の分類

ここでは、壺形土器、甕形土器(以下、形土器を省略)について、次のような分類を行い、遺構別に土器の在り方を整理する。紙数の都合もあり、ここでは文様のうち、ヘラ描沈線文、クシ描文といった主要文様について言及し、刺突文の類は補足的に扱いたい。

壺の分類 中・大型品と小型品に大別し、さらに中・大型品は以下のように細分した。

I類 前期の遠賀川式(系)土器の壺の系譜にあるもの。

II類 胴部が球胴形を呈すもので、I類よりも遠賀川式土器の系譜から遠ざかったもの。

III類 長胴形を呈すもの。このうち、口縁部が長く外反するものをA類、短く外反するものをB類とする。

IV類 短頸のもの。

甕の分類

I類 口縁部が外反または屈曲するもの。如意状ないしくの字状に外反・屈曲するものをA類、A類よりもさらに屈曲が進んだものをB類、口縁部が厚く逆L字状を呈すものをC類とする。

II類 口縁部に突帯を貼り付け、逆L字状を呈するもの。

さらに、これらの類・胴部にみられる主要な文様(ヘラ描沈線文、クシ描文、無文、木葉文や斜格子目文、段、貼付突帯など)を加えて、分類したのが表36である

3. 土器の特徴

SD9とSX2

古市流田遺跡では、自然流路SD9②~⑤層と自然の落ち込みSX2③層から第Ⅱ様式土器が出土した。いずれも黒色土の安定した堆積に土器が包含され、比較的短時間に形成されたものと判断している。包含層出土、さらに二次堆積という曖昧さを含むことは否定できないが、このことをふまえたうえで、ある程度の時間的まとも

りをもつ土器群と考えて良いだろう。

さて、この2地点から出土した土器群の様相は、ヘラ描沈線文とクシ描文の比率を大きく異にしている。器形を含めた検討は後述するとして、SD9ではヘラ描沈線文が、SX2ではクシ描文が主体を占める。このことを積極的に考慮し、ヘラ描沈線文→クシ描文への移行過程における両者の量比から、SD9→SX2という前後関係が想定可能である⁴⁾。

畿内の第II様式土器を検討した井藤暁子氏は、第II様式内の大別を詳しくあつかえるまでには至っていないしながら、「前半-第I様式の影響が残る段階」、「後半-第II様式としての独自性が発揮されている段階」という見通しを示している⁵⁾。この見方を参考に、「第I様式の影響が残る段階」=ヘラ描沈線文が一定量を占める段階、「第II様式としての独自性が発揮されている段階」=クシ描文が主体を占める段階と読み替えるなら、この前半にSD9、後半にSX2を宛うことができる。なお、ここで希望的観測を述べたならば、様式間にある過渡的な段階を想定することで、第II様式は将来的に数段階に細分可能と考えている。例えば、ヘラ描沈線文(第I様式的な土器)を一定量伴う段階、クシ描文の発展段階、そして、これまでの伝統的属性が払拭され第III様式への移行の兆しが窺われはじめる段階である。ただし、後者については第II・第III様式間の問題なので、ここでは棚上げしておきたい。

壺形土器

SD9では各類の壺が認められるが、SX2では、中・大型壺Ⅱ類・ⅢA類・Ⅳ類および小型壺が出土していない。これは実態を反映したのではなく、当遺跡出土の土器が当時の器種組成を完たすほど出土していないことによると考えられる。中・大型壺Ⅳ類・小型壺については、この可能性が非常に高い。また、第III様式にみられる長頸で口縁部が外反する壺への系譜を考えると、中・大型壺ⅢA類の欠落は想定しがたい。また、中・大型壺Ⅱ類は第I様式から系譜の通れる土器である。仮にSD9(第II様式古相)→SX2(第II様式新相)という関係にあるなら、第II様式新相では中・大型壺Ⅱ類が欠落しないまでも減少している可能性もある。

一方、SD9にみられる中・大型壺Ⅰ類の位置づけはどうか。まず、第89図76であるが、口頸部界を区画する段・沈線を消失した壺は、第I様式を4つの段階に分けたとき、3段階に出現する。第I様式末から第II様式にかけての土器が出土した長砂第1遺跡では、この類の壺が出土していることから、4段階にも存続することは間違いない。ここで、問題となるのは、その下限である。ここでは76が第II様式のものか否かは別に、第II様式古相に残る可能性を指摘しておく。また、木葉文が施された胴部片が1点出土しているが、周辺の遺跡で第I様式末から第II様式に伴うことが明らかなのは認められないことから、木葉文については第I様式の中で系譜が途絶えるものと推測される。ここで中・大型壺Ⅰ類とした第I様式の特徴を持つ土器の存続期間について

遺構名	器種	壺形土器							壺形土器					合計	
		中・大型壺				小型壺			Ⅰ類						
		I類	II類	III類	IV類	A類	B類	不明	A類	B類	C類	不明	II類		
SD9 ②~⑤層	類・胴部主要文様	ヘラ描文	1	4	1	2	4	1		8		1	1		23
		クシ描文							1						2
		無文							1	13	1			2	17
		木葉文他	1												1
		段													
		貼付突帯													
不明			5											5	
合計		2	4	6	2	4	1	1	21	3	1	1	2	48	
									20					26	
SX2 ③層	類・胴部主要文様	ヘラ描文					2			1				1	4
		クシ描文	1			2	1			3	3		1	5	16
		無文	1							6	2			1	10
		木葉文他	1												1
		段	1												1
		貼付突帯	1												1
不明															
合計		5			2	3			10	5		1	7	33	
									10					23	

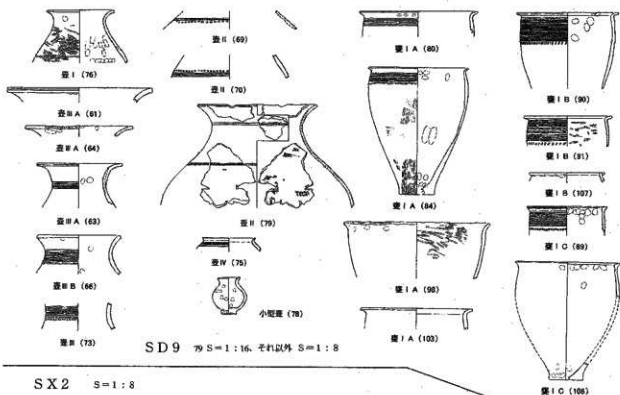
表36 壺形土器・壺形土器の分類表

ては、今後の課題である。

SD9、SX2どちらにも共通する器形に中・大型壺ⅢB類がある。この両遺構におけるⅢB類の差異は文様の施文工具にある。SD9の中・大型壺ⅢB類はいずれもヘラ描沈線文、SX2の中・大型壺ⅢB類はいずれもクシ描文である。量的な問題があり、この同一器形における施文工具の差異が時間的前後関係をどれだけ反映しているのかわからないが、口縁部の形態もSX2の方が短く外反する傾向があり、一つの変化の方向性を示しているだろう。

甕形土器

SD9では各類の甕が出土している。一方、SX2では甕ⅠC類が出土していない。また、甕Ⅱ類はSD9で1点、SX2で7点と出土点数に差が認められる。壺のところでも指摘したが、ここで出土した遺物が当時の器種組成を充たしていない可能性があるため、第Ⅱ様式新段階で甕ⅠC類が欠落し、甕Ⅱ類が増加するか否かは、遺構内一括遺物をもとに検討を必要とする。甕Ⅱ類は通称「瀬戸内甕」と呼ばれ、また、甕ⅠC類には甕Ⅱ類の影響が窺われる。遠賀川式(系)土器に伝統的な甕ⅠA類が、第Ⅰ様式後半に出現する甕Ⅱ類の影響を受けるこ



第89図 SD9・SX2出土の土器

とで、口縁部が逆L字状に屈曲するものと思われるが、これらの甕の在り方は瀬戸内と山陰地方の関係、さらに第Ⅱ様式土器の生成過程を反映している可能性があるだろう。

各類の甕に施される文様にも差異が存在する。無文の甕を除く有文甕に占めるクシ描文の割合は、SD9で98%、SX2で80%である。さらに、甕ⅠA類ではSD9出土8点が全てヘラ描沈線文、SX2では4点中3点がクシ描文である。一方、甕ⅠB類は全てクシ描文である。このことは甕ⅠB類が甕ⅠA類より新相であること、さらに、第Ⅱ様式新相と予想されるSX2では、甕ⅠAにおける文様のクシ描施文が進行していることが窺われる。

その他の装飾要素

壺の口縁端部にみられる装飾にはヘラ描文、刻目がある。ヘラ描文には平行沈線文、斜線ないし斜格子目文がある。平行沈線文はSD9にはみられるが、SX2にはみられない。斜線ないし斜格子目文は両遺構に認められる。器形との対応関係をみると、SD9では壺ⅢA類に、SX2では壺ⅢB類の口縁端部に施される。刻目は、SD9出土の大型壺にのみ認められる。

甕には、口縁部に刻目をもつものが少量認められるが、大半は無刻目である。また、1条のヘラ描沈線文状を呈すものはあるが、壺の口縁部にみられるような明瞭な沈線を伴うものはみられない。

また、壺・甕の頸胴部にはヘラ描沈線文、クシ描文に組合わさる形で、連続刺突文が施されるものがある。刺突文には、ヘラ状工具により平面形が三角形または方形を呈すもの、クシ状工具によるもの、竹管状工具または巻貝頂部による円形のものなどのバリエーションがある。基本的には、ヘラ描沈線文にヘラ状工具による刺突、クシ描文にクシ状工具による刺突が組み合う場合が多い。壺に関しては後者の組み合わせは認められず、クシ描文とヘラ状工具による刺突である。また、円形の刺突はヘラ描文と組合わさる。

調整ほか

器面の調整にはハケメ、ナデ、ミガキがあり、ハケメを基調に、ナデ、ミガキが施されるものもある。胎土は粗い砂粒を含むものが一般的で、第Ⅰ様式と明瞭な違いは認められない。なお、感覚的なものかもしれないが、断面に接合痕のみえる個体は少ないように思われる。

5. まとめ

古市流田遺跡、SD9およびSX2から出土した第Ⅱ様式土器を概観した結果、これらの土器群が時間的前後関係にある可能性を指摘し、文様、器形など一部の属性に関する変化の方向性を想定した。第Ⅱ様式古相にSD9、新相にSX2が相当すると考えるが、現状では見通しに過ぎない。ここで示した見通しの是非、特に第Ⅱ様式古相の位置づけは、第Ⅰ様式と第Ⅱ様式の過渡的段階をどのように捉えるかといった立場の違いにも関わっている。ヘラ描沈線文、クシ描文の両者が出土するといった状況をどのように整理していくかが問題であろう。また、ヘラ描、クシ描の違いを除けば、区別のつきにくい個体が多く存在しているが、今後、器形と文様の組み合わせ、または、器形の微細な変化などを系統別に整理していくことで、解決を図ることが可能かもしれない。ここでは、他の遺跡にみられる遺構内出土資料との比較検討を行うことができなかったが、機会を改めたい。

(濱田)

註1) 松本岩雄 1992 「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社

2) 清水真一 1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社

3) 濱田竜彦 2000 「山陰地方における弥生文化成立期の様相—山陰地方東部を中心に—」『弥生文化の成立』第47回埋蔵文化財研究集会

4) ただし、SX2③層の下層には第Ⅰ様式土器が包含されており、下層にほとんど遺物を含まないSD9に比べ、SX2③層の方が第Ⅰ様式土器の混在が予想される。SX2にみられる混在は壺Ⅰ類に顕著である。第89図143や144といった口頸部を区画する段や沈線は、第Ⅰ様式土器にみられる属性である。特に段をもつ壺は、クシ描文を含まない第Ⅰ様式末の段階には器壁組成から欠落している。壺Ⅰ類の中には混在したものがいくらか含まれていると考えられ、壺ⅠA類・無文(特に口縁端部を刻むもの)の中にも混入品があると思われる。しかし、両遺構に想定される前後関係を考慮すると、SX2の方がヘラ描沈線の占める割合が少ないことから、この混入がここで行う検討に差し支えないものと考えられる。

5) 井藤暁子 1983 「近畿」『弥生土器Ⅰ』ニュー・サイエンス社

写 真 图 版



古市遺跡群

図版 2



1 調査区調前、全景（北西から）



2 P 29完掘状況（北から）



3 ビット群3完掘状況（北から）



4 SX1検出状況（北から）



5 SX3検出状況（東から）

古市コガノ木遺跡



1 SD3完掘状況 (東から)



2 調査区東壁A-A'土層断面 (西から)



3 調査区東壁 A-A'土層断面 (西から)



4 SD5完掘状況 (東から)



5 トレンチ内C-C'土層断面 (西から)



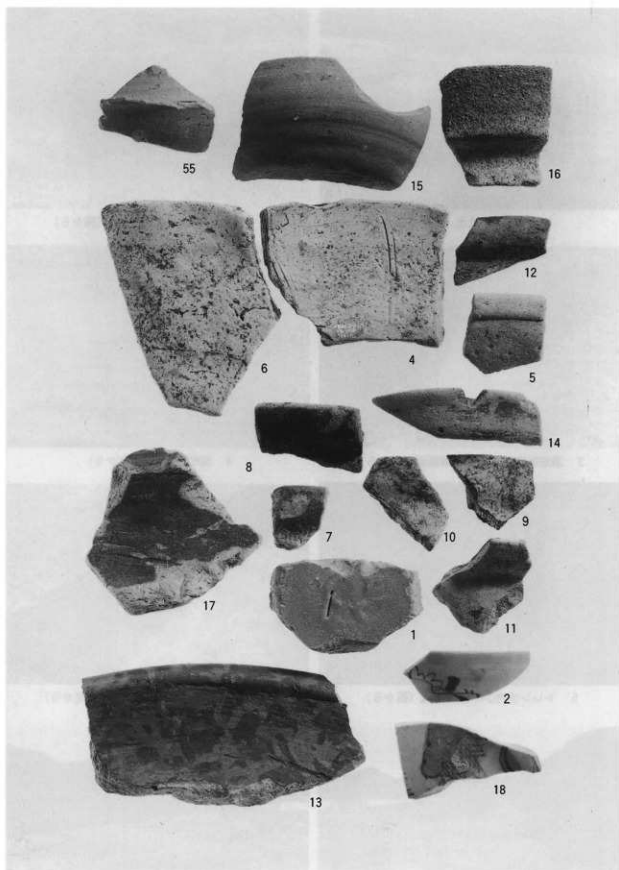
6 SX1トレンチ内B-B'土層断面 (東から)



7 完掘状況 (南東から)



8 完掘状況 (北西から)



1～3 SX1出土土器 4～16 4層出土土器 17・18 3層出土土器



古市流田遺跡



1 SB1完掘状況
(東から)



2 SB1 P136
(南西から)



3 SB1 P138
(東から)

1 SB2完掘状況
(北西から)



2 SD1土層断面
(南東から)



3 SD1完掘状況
(北から)



4 SD2土層断面
(北西から)





1 S02完掘状況
(北西から)



2 S03完掘状況
(西から)



3 i6区5層遺物出土状況
(北から)

1 S11完掘状況
(北から)



2 S11遺物出土状況
(東から)



3 SB4完掘状況
(北東から)

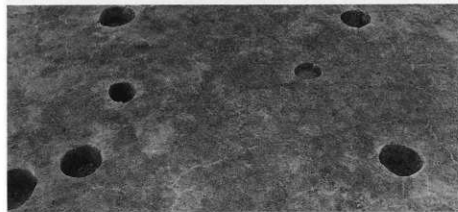




1 S85完掘状況
(南から)



2 S86完掘状況
(南から)



3 S89完掘状況
(南から)



4 S810完掘状況
(南から)

1 SB11完掘状況
(南から)



2 SB12完掘状況
(北から)



3 SK3遺物出土状況
(南西から)

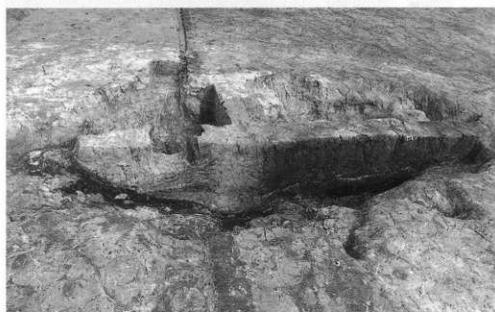


4 P179遺物出土状況
(南西から)





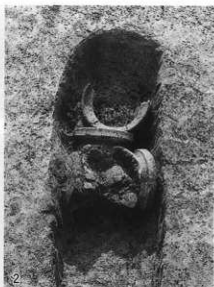
1 SK7遺物出土状況
(南から)



2 SK8土層断面
(西から)



3 SK8完掘状況
(北から)

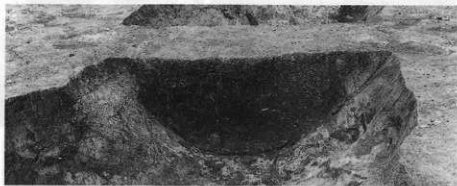


1 SK9完掘状況(西から)

2 SD5遺物出土状況
(南西から)



3 SD6土層断面
(北から)



4 SD6土層断面
(西から)



5 SD6完掘状況
(北から)



1 SD9土層断面
(南から)



2 SD9土層断面
(南から)



3



5



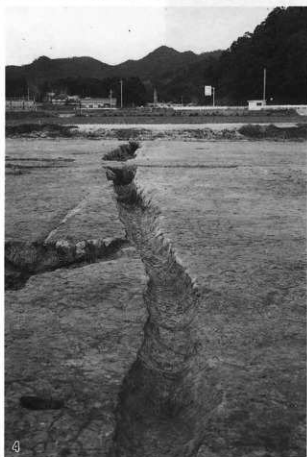
4

3・4 SD9遺物出土状況

5 j5・k5グリッド
SD9土坑状の落ち込み
(北から)



6 SD9完掘状況
(南西から)



- 1 SD10土層断面 (南から)
- 2 SD10完掘状況 (南から)
- 3 SD15土層断面 (西から)
- 4 SD15完掘状況 (東から)
- 5 SD15完掘状況 (西から)



1 SX2③層遺物出土状況



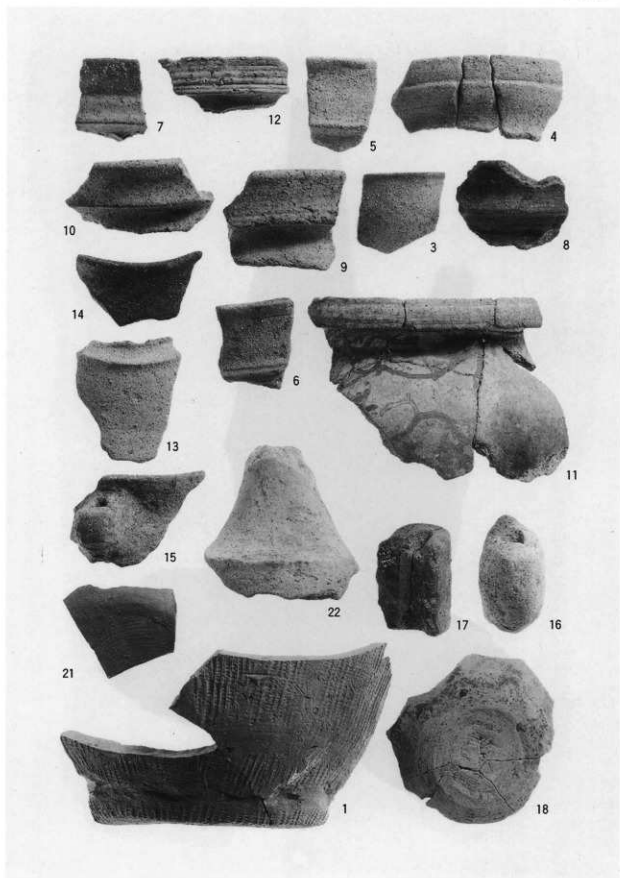
2 SX2①層遺物出土状況



3 SX2土層断面
(北から)



4 SX2完掘状況
(南から)



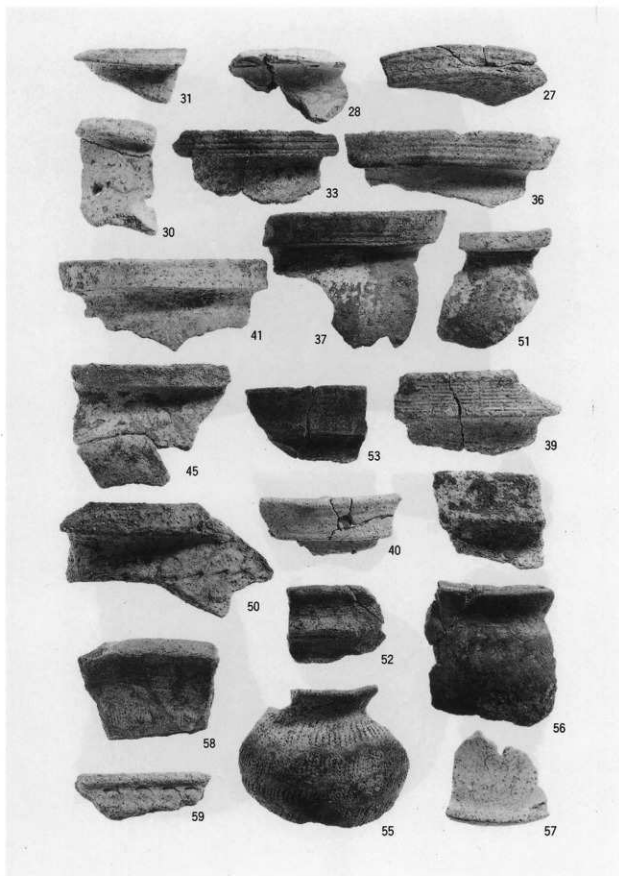
1・3～17 SD1出土土器 18 SD2出土土器 21・22 SX1出土土器



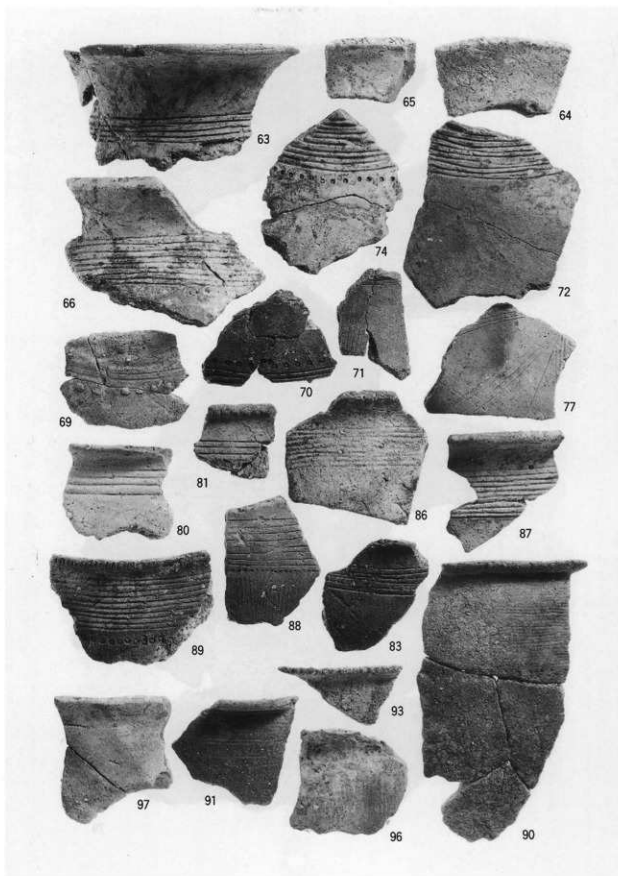
SBI出土柱材



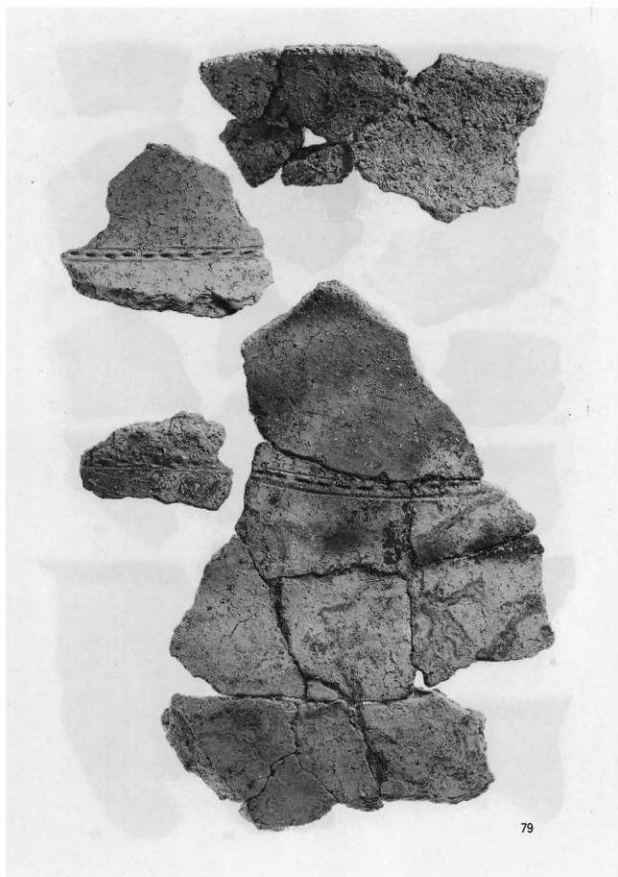
23 SK7出土土器 24~26 SK8出土土器 139~142 SD15出土土器



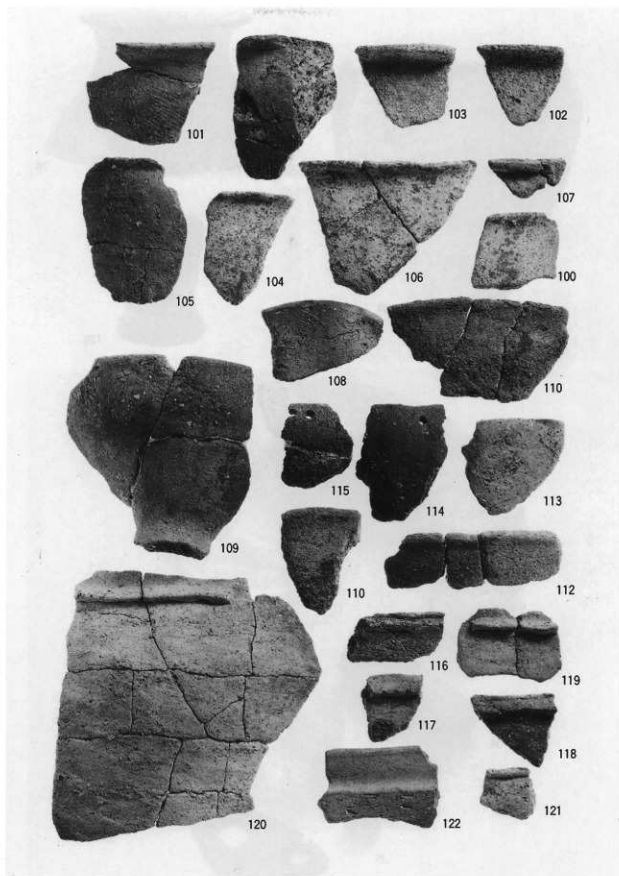
S09①層出土土器



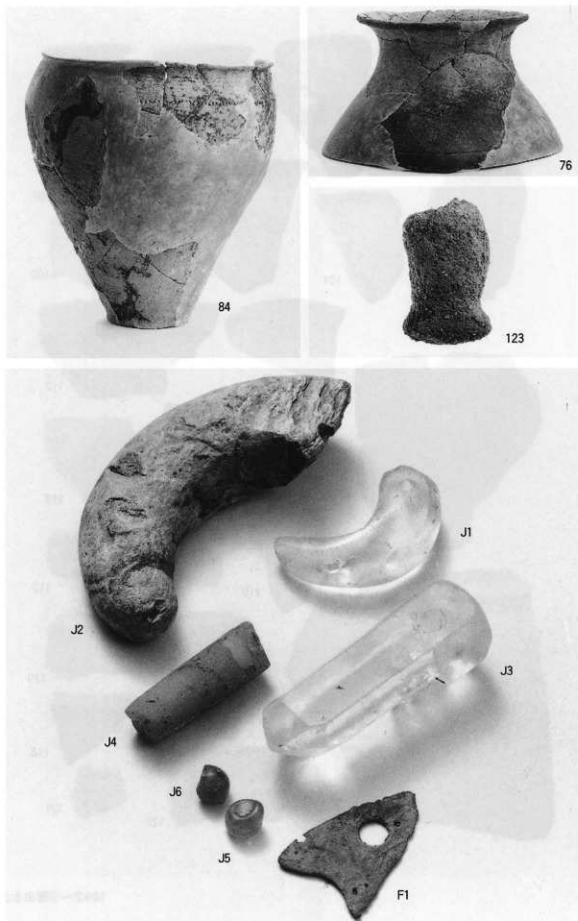
SD9②~⑤層出土土器



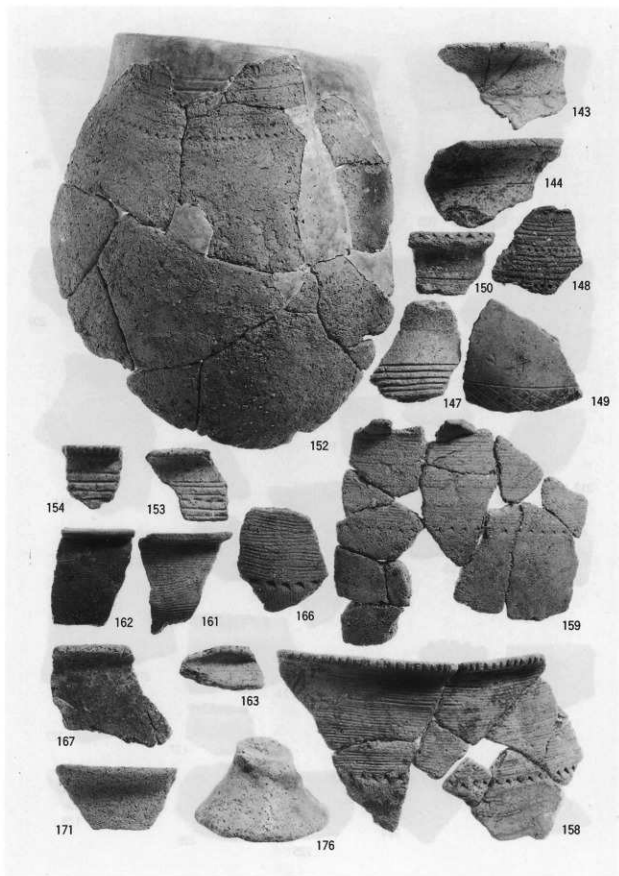
SD9②~⑤層出土土器



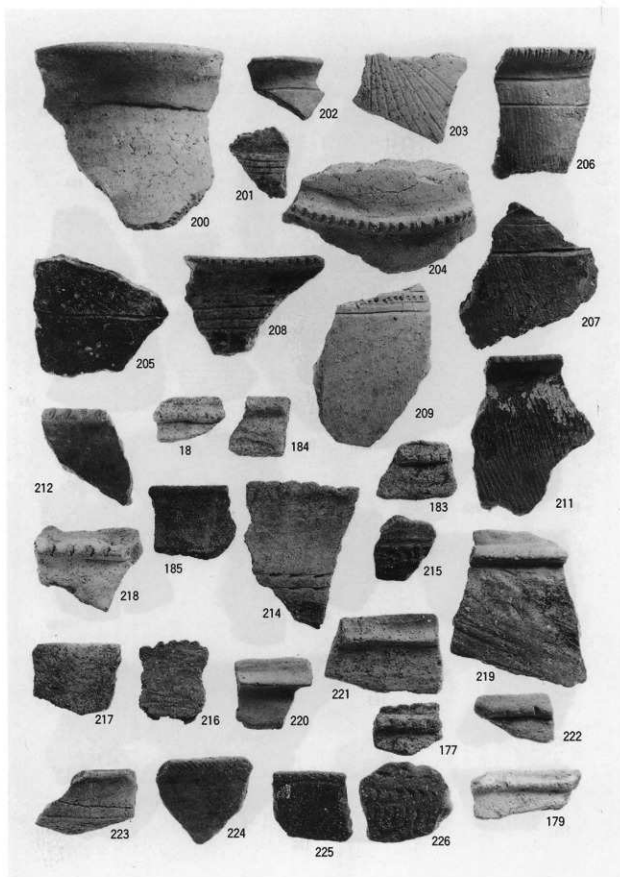
SD9②~⑤層出土土器



76・84・123 SD9②～⑤層出土土器、土製品 J1～J6・F1 5・6層出土玉類・鉄製品



SX2③層出土土器

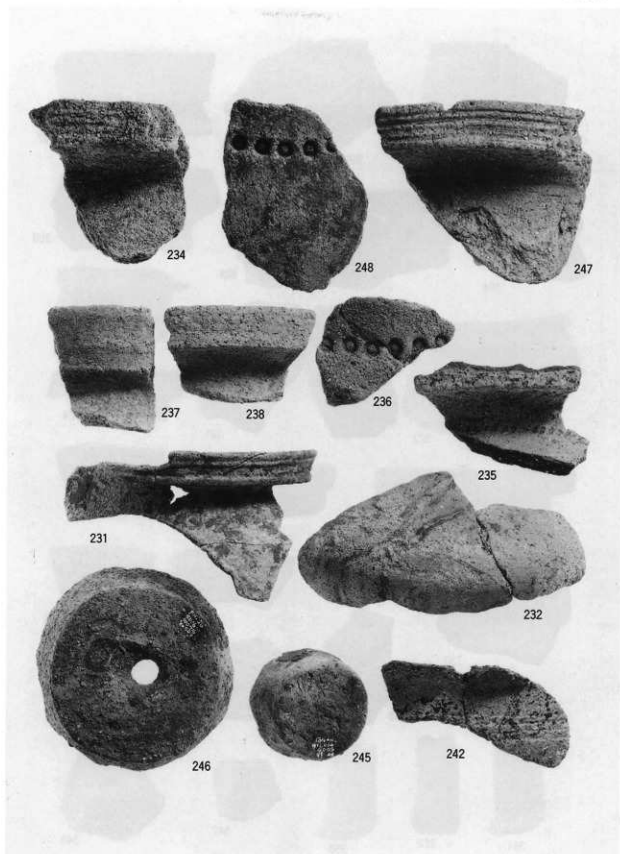


SK2③層・⑦～⑩層出土土器

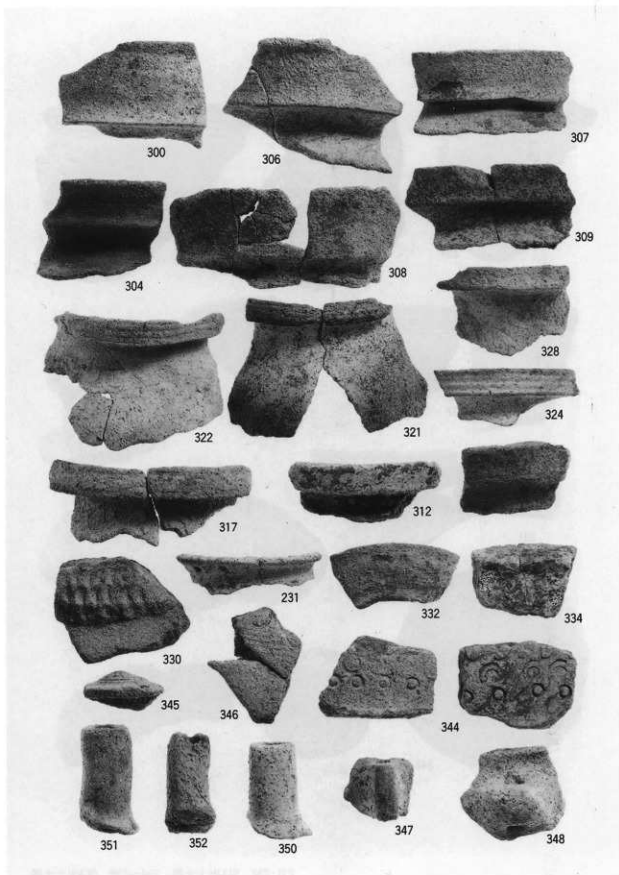




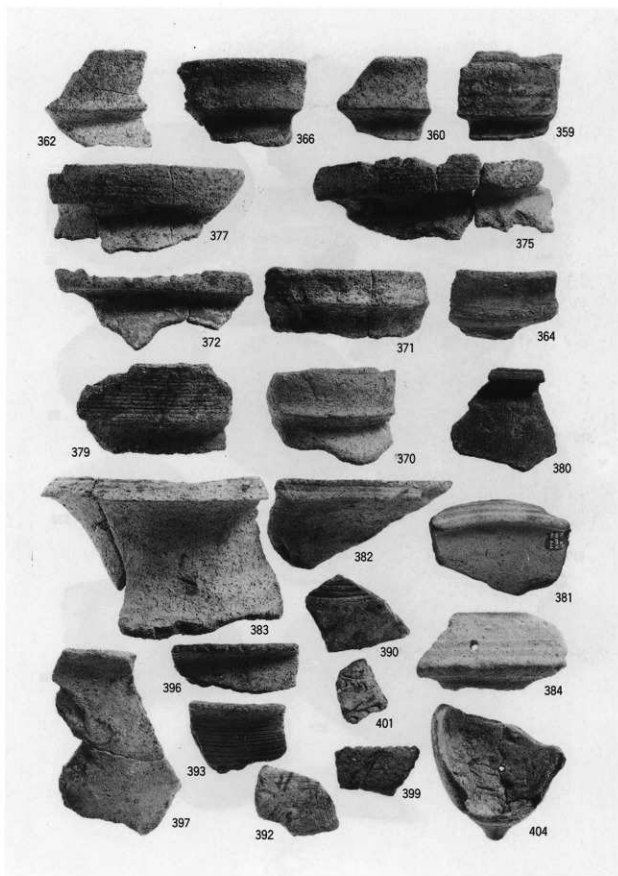
SX2出土土器



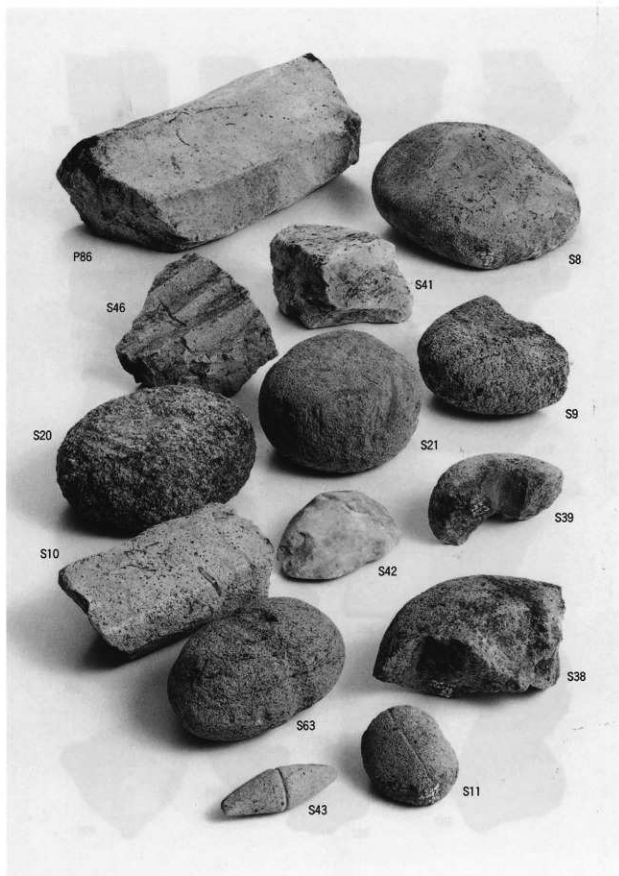
231・232 S11出土土器 234～238 SK3出土土器
242・245・246 SD6出土土器 247・248 SD10出土土器



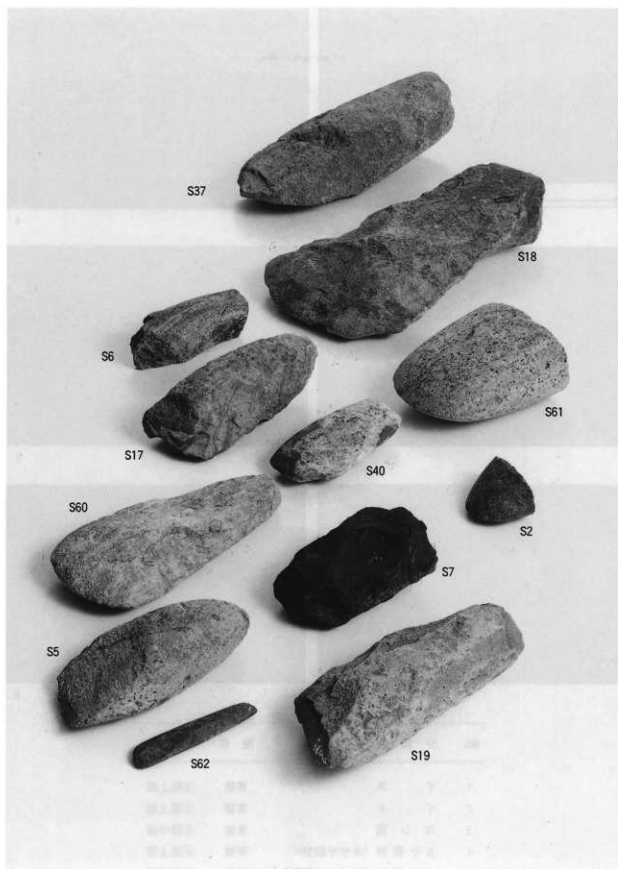
5層出土土器



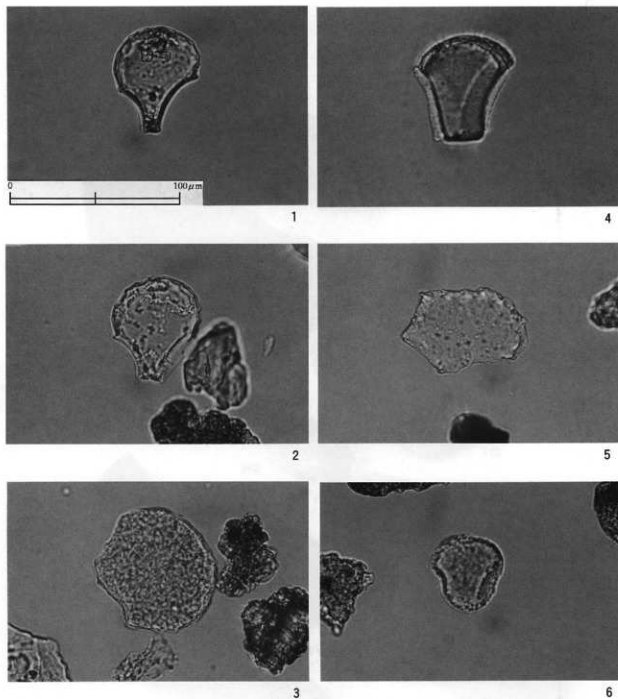
6層出土土器・土製品



石器（礫石器他）

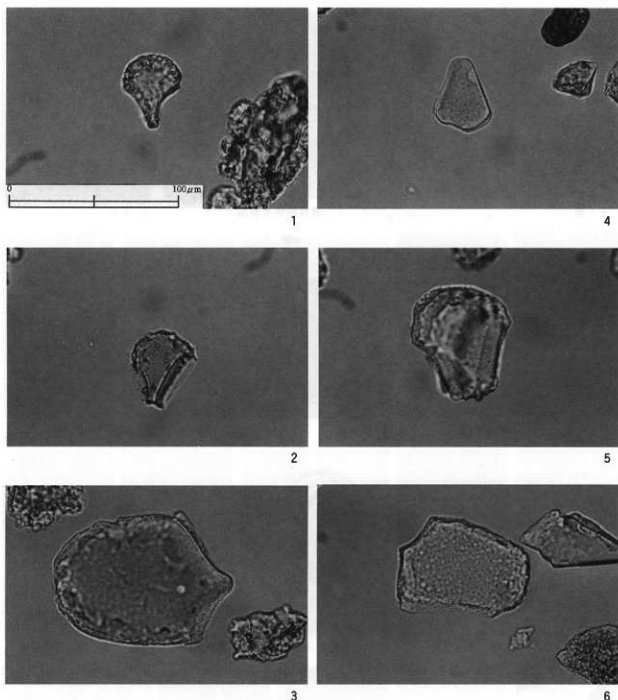


石器（石斧類）



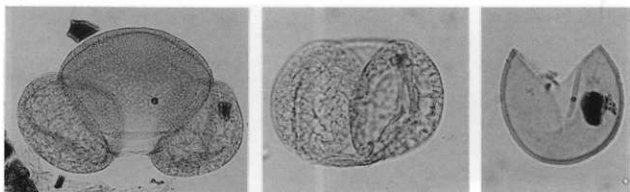
No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	東壁	③層上部
2	イネ	東壁	③層上部
3	ヨシ属	東壁	⑥層中部
4	タケ亜科(ネザサ節型)	東壁	⑥層上部
5	タケ亜科(クマザサ属型)	東壁	⑥層下部
6	ウシクサ族(スキ属)	東壁	⑥層下部

プラント・オパール(植物珪酸体)の顕微鏡写真



No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	SX 2	③層
2	イネ	SX 2	③層
3	ヨシ属	SD15	②層
4	ウシクサ族 (ススキ属)	SX 2	③層
5	タケ亜科 (ネザサ節型)	SX 2	⑩灰色シルト層
6	タケ亜科 (クマザサ属型)	SX 2	⑪黑色土層

プラント・オパール (植物珪酸体) の顕微鏡写真

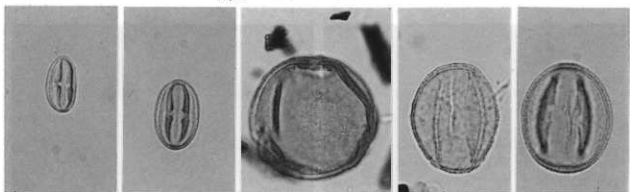


1 モミ属

-10 μm

2 マツ属複雑管束亜属

3 スギ



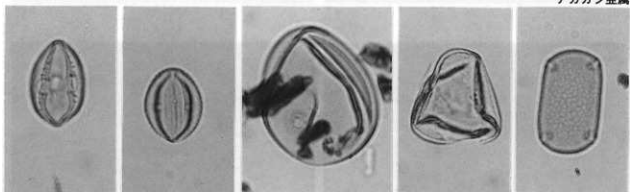
4 クリ

5 シイ属

6 ブナ属

7 コナラ属コナラ亜属

8 コナラ属
アカガシ亜属



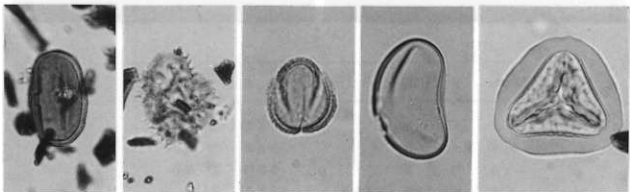
9 トチノキ

10 ブドウ属

11 イネ属型

12 カヤツリグサ科

13 ツリフネソウ属



14 セリ亜科

15 タンポポ亜科

16 ヨモギ属

17 シダ植物単条溝胞子

18 シダ植物三条溝胞子

-10 μm

花粉・胞子遺体

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふるいちいせきぐん							
書名	古市遺跡群 2							
副書名	一般国道180号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	II							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	62							
編集者名	濱田竜彦、内田浩文、吉田 学、濱 隆造							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-0151 鳥取県岩美郡国府町宮下1260 Tel.0857-27-6711							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コ ー ド 市 町 村 遺跡番号		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
ふるいちこがのこいせき 古市コガノ木遺跡	米子市古市 字コガノ木	31202	2-644	35度 10分 50秒	133度 33分 13秒	19991001 ～ 19991127	1,605㎡	道路改良 工事に伴 う調査
ふるいちながれだいでいせき 古市流田遺跡	米子市古市 字流田	31202	2-393	35度 23分 29秒	133度 20分 4秒	20000401 ～ 20001021	8,514㎡	
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
古市コガノ木遺跡	その他の遺跡	中世～近世		溝状遺構 6 集石 1 池状の落込 1 枕状 1 ビット 81		弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・石製品・石器		
古市流田遺跡	集落跡	縄文時代～中世		竪穴住居跡 1 掘立柱建物跡 12 土坑 9 溝状遺構 16 不明遺構 2 ビット 328		縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・土製品・石器・石製品・ガラス製品・金属製品		

鳥取県教育文化財団調査報告書 62

一般国道180号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

鳥取県米子市

古市遺跡群 2

古市コガノ木遺跡

古市流田遺跡

発行 2000年3月31日

編集 財団法人鳥取県教育文化財団

鳥取県埋蔵文化財センター

〒680-0151 岩美郡国府町宮下1260

電話 (0857) 27-6711

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

印刷 中央印刷株式会社